

筆者のブログにてまとめた解説と Q&A のまとめ

(作文プリントについて)

本書は特別支援学級・通級を中心に使用することを前提に開発された作文指導プログラムです。

応用行動分析学を活かした、読み書きが苦手な子どもの学びを支援する教材集で、カードやプリントを使った基礎、日記、観察文、感想文、手紙・新聞などの5つのプログラムで、集団指導と個別化の併用ができます。個々の記憶状況を把握できる記録用紙も収録しています。

以下のような構成です。

はじめに

第1章 河村式作文プリントを用いた指導システム

第2章 基礎プログラム

第3章 日記プログラム

第4章 観察文プログラム

第5章 感想文プログラム

第6章 手紙・新聞プログラム

Q：家庭でもこの本の内容を行うことはできそうですか？

A：題材の多様化が重要です。

・学校での作文のレベルの育ちを、少し後追いするような形での進行になると思います。例えば学校でステップ10をやっていたら、家庭ではステップ8くらいを進行する、というようなイメージです。家庭が先行する場合も考えられますが、本書に含めた作文筆記前の事前指導は、集団での活動を前提としているため、適宜アレンジが必要となります。

・学校で作文を書く際、観察文プログラムについては題材に事欠くことはありません。そこら中に動物・植物がいますので。ただし、家庭で、となると題材の確保が難しいこともあると思います。昆虫やペットは成長に伴う変化が見えにくいでしょう。そこで成長の速い植物を育てながら行うことをお勧めします。

・日記プログラムについても学校では事欠くことはありません。日々の授業の内容、休み時間の他、近年の小学校では毎週のようにイベントがあります。家庭で実施する場合、毎回書く題材が「お買い物に行った」だけにならないよう、週末の過ごし方を多様にする必要が生じます。

・感想文プログラムも同様で、学校では図書の時間に好む本を借り、読み聞かせでは教師が選んだ本や紙芝居に触れ、国語の授業では教科書を音読し、というように、感想文を書く題材が豊富にあります。本だけでなく、紙芝居でも動画でも構いませんが、家庭で行う場合「一番好きな物だけでなく、その次ぐらいの作品にも触れる」というように、少しずつ触れる作品を増やすと良いでしょう。

・さらに、各プログラムの後半では、オリジナリティのある文章を書くことを求められます。ここで友達の作文の鑑賞が重要となります。家庭で行う場合、WEB で各種作文コンクールの受賞作がアップされていますので、参考にしてみましょう。

Q：幼児教育で使用する上で注意すべき点がありますか？

A：前駆的なスキルの指導を充実させましょう。

・本書のプログラムには会話を契機として文章を書く指導が多数含まれています。そこで重要なのが、子どもが積極的に他者と会話をしようと思うことです。子どもの発話を引き出せるよう、子どもの話に興味をもち、うんうん言いながら聞きましょう。その上で質問応答がある程度正確にできたらなお GOOD です。

・鉛筆を持つ、仮名を読み書きする等のスキルも幼児期にある程度習得できる子がいます。詳しくは「河村式ひらがなプリント」「河村式カタカナプリント」の解説をご参照ください。

Q：特別支援学級で使用する上で注意すべき点がありますか？

A：友達と進度や文章の量を比較しないように指導しましょう。

・本書のプログラムは「ステップ○」というように、進行が番号で分かるようになっています。これは子どもにとってレベルの向上が分かりやすいため、モチベーションを高める上で役に立ちます。

・ただし、特別支援学級には多様な子ども達が在籍しているため、当然個々に進度の差が大きく生じます。そのため、隣の子よりもステップが進んでいない、文章の量が少ないなどのネガティブな受け取り方をしないようにあらかじめ指導しておきましょう。

Q：通級で使用する上で注意すべき点がありますか？

A：記憶を維持できる期間に留意が必要です。また、子どもの日常生活の状況を担当教員がどの程度把握できるかがカギです。

・通級で子どもが課題に取り組めるのが週に1回だとすると、残りの6日間の間に学習した内容を忘れてしまうことがあります。家庭の負担に留意し、さらに在籍学級での宿題の量なども考えながら、家庭学習で復習を行うことも考えましょう。

・通級の担当教員は子どもの日常生活から距離のある存在になることがあります。例えば子

どもが昨日の休み時間に何をしていた、晩御飯は何だったか等、その子に会う頻度が少ない文、情報の把握は保護者や在籍学級の担任と比較して行いにくくなります。だからこそ個別指導場面での会話を通し、どれだけその子の普段の様子を把握できるかが作文の題材設定のカギになります。

Q：通常学級で使用する上で注意すべき点がありますか？

A：文型を使用する子どもと、標的となる語彙の提示のみで指導する子どもを分けて考えましょう。

・本書のプログラムでは、特定の文型に出来事をあてはめて作文を構成する指導法が大部分を占めます。この方法の場合、作文が苦手な子どもでもスムーズに筆記量を増やせますが、固定的な内容の作文になりやすいのも事実です。

・そこで、この文型に当てはめる指導を行う子どもと、自分で文章を考える子どもをある程度分けて考えると良いでしょう。例えば年度の最初に今年目標を書かせる時間を活用し、文章の筆記について丁寧に支援すべき子を見つけておくのも良いでしょう。

・文章記述が苦手な子については本書のプログラムを順に進めていきましょう。得意な子については、文型は自由としつつも「今日は“比べて”を使ってみよう」というように、語彙を指定すると、より多様な文章記述につながります。

Q：本書の内容を放課後等デイサービスで使いたいのですが、学校での指導と異なるところはありますか？

A：注意の集中がしやすい環境を作りましょう。

・余暇の時間に様々なレジャー施設に行くデイサービスも増えていきますので、作文の内容には事欠かないかと思います。

・学校での作文は大抵、クラス全員が静かな状態で書くことになります。デイサービスは余暇の指導の側面もあるため、玩具などが施設内にあるかと思います。玩具は仕切りなどで隠し、さらにパーテーションで机を区切るなどの方法で、集中しやすい環境を作り、取り組むと良いでしょう。

Q：特別支援学校で使用する上で注意すべき点がありますか？

A：音声言語から筆記への反応の移り変わりをサポートする必要があるでしょう。

・本書には口頭での会話を元に内容を考え、筆記を促す仕組みが含まれています。

・そのため、質問応答を含む口頭での会話が成立すること、仮名の筆記ができること等が前提となります。仮名については「河村式ひらがなプリント」「河村式カタカナプリント」の解説をご参照ください。

・仮に質問応答ができ、かつ文字の筆記ができたとしても、「自分が話したことを書く」ということに困難が生じる子どももいます。このような場合、ごく短い単語等から「話したことを書く」「聞いたことを書く」という練習を積む必要があります。